

---

# Angels wing

五十嵐 イツキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Angels Wing

### 【Nコード】

N8754E

### 【作者名】

五十嵐 イツキ

### 【あらすじ】

私は空が好き。だって青い空からは・・・あの人が見守ってくれるから。私達を救ってくれたあの人が。      ねえ白・・・私  
たちはあなたを忘れないからね。青い空に誓いを捧げて、私達は精一杯生きるから・・・。

片方だけの蒼い瞳も、出せない声も  
全部貴方に捧げる

だから  
私たちにまた、あの笑顔を見せてくれませんか???

2

Angels wing  
天使の翼

空が青い。  
ただそれだけなのに胸がキシキシと音を立てて軋む。  
空の青さは私にあのヒトを思い出させる。

今現在、隣の国と戦争ニヂニーシンヤしてるとは思えないほど綺麗な色。

ぽおつと空を見上げていると、ふと目の前に白い羽が見えた。吃驚して一步後ろに引いたら、風に靡いて羽はヒラヒラと踊った。小さくてふわふわしている羽だった。きつと生まれたてのウエンの羽だろう。

『キラ  
綺羅・・・??』

声が掛かって振り向くと、真っ黒の髪をした青年が立っていた。私はこの男を知っている。

私が大きく目を見開いて驚くと、彼は一瞬照れくさそうに目を伏せた。

『やっぱりそうだよな。キラ!』

大声で私の名を呼ぶ彼。

灰色の瞳の大きな目。私は彼の目が眩しく見えて思わず目を逸らした。

彼は小走りで私の近くへ寄って来て、少しだけ微笑んだ。

あのときより、彼は大人っぽくなった。背もずいぶん伸びたみたいだ。

整った顔が嬉しそうに笑った。

ああ、よかった。笑顔は子供の頃のままだ。

『久しぶりだな、三年振り??キラ。』

ところで、どうしたんだ。こんな朝早くから・・・』

どうしてこの男は、繰り返し私の名を呼ぶのだろう。  
一瞬だけ眉を寄せると彼は目尻を下げて微笑んだ。

『“そつちこそ、なんで??” って顔してるな』

そう言うってから、彼は愉快そうにクツクツと笑った。  
私は彼の笑顔が好きだ。

彼は蓮<sup>レン</sup>・・・私の大切なヒト。

私は“ひさしぶり”の意味を込めて微笑んで見せると、レンは少しだけ目に影を宿した。

『・・・まだ、声治ってないんだ・・・』

私は小さく頷いた。  
目を伏せたレンはギュツと乾燥した唇をかんだ。そこからは薄っすらと血が滲んでいる。

『俺は・・・治ったよ・・・右足』

苦しそくに息を吐き出すレン。

よかった・・・レンの足が治って。

私は自分の左目を指差してパクパクと口を動かした。彼は“ああ”  
と言って頷いた。ちゃんと私の意図に気付いてくれた。

レンは自分の右目に手を当てた。

灰色だった瞳は片目だけ澄んだ青に変わった。

『俺もキラと一緒にだ』

彼は満足そくに微笑んだ。  
私も釣られて微笑んだ。

オッドアイは忌み子を意味する。  
けれど私達はこの目に誇りを持つてる。

『・・・アイツ、喜んでくれてるかな・・・』

レンは自分の右目を閉じて瞼に触れた。  
私も自分の左目の瞼にそつと触った。

オッドアイの両眼をそつと閉じて黙禱を捧げる。

アイツ・・・白<sup>ビヤク</sup>。

私達の目となり大きな翼となってくれた大切な人に。

私達は三年前、事故に遭った。

あの時の私は声が出ていて、両目も黒かった。山という場所にレンと私とビヤクの三人で行ったのだ。

私は緑に囲まれてキヤーキヤー歓喜の声を上げていた。レンもビヤクも楽しそうに遊んでいた。

だけど・・・。

胸がまた軋んだ。

『ビヤク　　レン！！早くっ・・・ウエンが生まれる！！』

私は木の上の上って大きな幹に腰掛けて二人を呼んだ。

二人の少年は少し焦りながらも慎重に上ってきた。私はまた“早くう”と言った。

大きな幹が三つ重なった所にウエンという鳥の巣があった。

いくつかの卵からコツコツと規則正しい音がして、たまにピシッと亀裂が入るような音もしていた。もうじきウエンが生まれる合図だ。

二人が少しだけ息を弾ませて巣を覗いた瞬間に、卵が割れた。

一羽が顔を覗かせると、まるで合わせたかのように次々とウエンが生まれた。

ピピピピピとウエン特有の高い鳴き声が碧の山に響きわたった。

三人は顔を見合わせてから、彼等の誕生に感動していた。

『すごかったね・・・私ウエンが生まれる所初めて見た・・・』

私は小さなため息と共に言葉を吐き出した。

木から下りた後、私たちは帰路である岩山を歩いていた。

『ああ・・・マジ感動もんだっつたよな。俺、ちょっと泣きそうだった』

『ってか、レンちょっとだけ泣いてたよねえ？』

意地悪そうにビヤクが笑った。

『うるせえ!!』

頬を赤く染めてレンが叫んだ。私とビヤクは笑って岩場を走った。

その時だった。

ビヤクが足を踏み出した瞬間に彼の足元の岩が崩れた。

あっと叫ぶまもなくビヤクは数十メートルは有るであろう岩場を真つさかさまに墮ちた。私とレンは目を見張ってビヤクが落ちる瞬間を見た。

刹那ガラガラと音を立てて私とレンが乗っていた岩も落ちた。

『『ツ!!?』』

私はすごい速さで変わっていく景色を見て、頭が真っ白になってそのまま気を失った。

目が覚めた時は白いカーテンがゆらゆらと目の前で揺れていた。

どこだろう、と思って上半身起きあがらそうとしたが体中に鋭い痛みが走って出来なかった。

その瞬間に消毒液の臭いが鼻を掠めて“ああ、病院だ”とわかった。

ミリ単位で体を動かしただけで電流行が走ったかのように痛くて、仕方なく目だけを動かして部屋を見た。

しかし、どうしても左側が見えなくて私は困惑した。

どうしてだろう……。

左目……包帯が巻かれてる……???

『気がついた??』

聞きなれた声が聞こえて、反射的にそちらに顔を向けた。否、向けようとした。しかし、首と頭と左目に鋭い痛みが走ってそこに立っているだろう人を認識出来なかった。

……ビヤク???

私は声を出そうとしたけど、空気の漏れる音しか出なかった。

『ねえ、キラ。これから話すこと・・・信じてくれない??』

優しい声色のビヤクの声。

私は心の中で“うん”と頷いた。彼は分かってくれたみたいで、話し出した。

『キラ。僕はね・・・。遠いところに行かないといけなみたいなんだ。キラにもレンにも・・・誰の目にも見えない所。』

・・・どこに行くの??

だめ。行かないで!!ずっと私達のそばにいてよ!!

『大丈夫だよ・・・僕はずっと二人の傍にいるよ。二人の目となつて・・・。二人の見たもの、感じたもの。僕も一緒に感じて見守ってるから。二人は・・・キラとレンは精一杯生きていて・・・??』

内容が衝撃的過ぎて頭に入ってこなかった。

それ以上に、“ずっと生きていて”のところが妙に引っかかる。

ビヤク???ねえ、そんな寂しいこと言わないで・・・ずっと三人でいようよ!!・・・ねえ!?

『・・・ごめんね・・・僕は、もう一緒にいられない。もう、行かないとダメみたい・・・。ごめんね。あの時僕がふざけていなければ

ば……。』

手を伸ばして彼にさわった。激痛が伴ったが今はそれ所ではなかった。

ビヤクが……遠い所へ言ってしまう。私達と一緒にいてくれない。

とても冷たくて柔らかい物が当たった。それは私の手を握ってきた。

ビヤクの手なのだろう。一度だけ強く握って“ごめんね……今までありがとう”と言って離れた。

『……い……びゃ……く……いかな……おい……て……いで』

【いや……ビヤク……行かないで、置いてかないで】

必死に掠れた音と共に声を絞り出す。暖かい液体が頬を伝った。

一度離れた柔らかい手がもう一度傍に置かれた。一瞬迷ったように動いたみたいだけど、私には触れなかった。

変わりにとても柔らかい声がした。少し震える、優しい声。

『僕は……キラとレンの翼になるんだ。だから……二人でこれからの未来に行つて。僕の代わりに……生きて。お願いだから』

“僕の希望をのせて……そして、できたら僕を忘れないで”

彼は私の左目にそつとキスを落とした。その瞬間風が吹いて  
ビヤクの気配は消えた。

いやあああああ！！！！！

私は出ない声で叫んだ。

『おいッキラ！！』

肩を激しく揺さぶられて我に返った。

あの時と同じ生暖かい液体が頬を伝っていた。

レンは心配そうに私の目を見詰めてから“大丈夫か？”と問いかけてきた。

私は微笑んで頷くとレンの手をとった。

後で医者に聞いた話だけど。

救急隊員が駆けつけたときビヤクは虫の息で、私とレンは気を失っていたらしい。

しかも私は左目の眼球を傷つけ失明し、喉も瞑れて声が出にくくなっていた。同じくレンは右目の眼球と右足の怪我。

臓器をひどく破損してもう助からないと宣告されたビヤクは薄れる意識の中で医者に私達に目を移植するように頼んだらしい。

“片目だけじゃ色々と不便だから……”

最後に私達を見て微笑んで彼は静かに息を引き取った。

私のところにきた動けないはずのビヤクは、最後だということ報告しに着てくれた……みたいだ。

だから……私達は生きてみせる。

ビヤクのくれたチャンスと目と翼を活かして……。

『行くか・・・ビヤクのところへ』

私が握った手を離すことなどせず、レンはゆっくりと歩き出した。私は大きく頷いた。

私達の向かう場所はビヤクの眠るあの場所。

私達が揃って踏み出した瞬間にウェンが飛び立って新しい羽を落としました。その小さな羽は私達の歩く道を先立つかのようにヒラヒラと前に散っていった。

『ビヤク・・・』

小さな白い花束を彼に手向ける。その隣ではレンが手を組んで跪いた。私もそれを真似て隣で手を組んだ。

『ビヤク、キラ・・・あいな。俺』

目を瞑ったままレンは話し出した。私はそれに相槌を打つことも、話を遮ることもなかった。

『俺、医者になるよ。ビヤクがくれたチャンスをいかして・・・。戦争で傷ついた兵士や、そのほかの沢山の人々。助けを求めている命を助きたいんだ』

一粒だけ涙を流して彼は立ち上がった。

『俺、限界まで行ってみるよ。絶対ビヤクの代わりに生き抜いて見

せるからな』

そういつて笑った。

ビヤク・・・私は特に何も決まっていなの。  
だけど、けどね??

私、最後にあなたと話せて嬉しかった。私に“生きる”って言うて  
くれて有り難う。  
そうじゃなかったら私もしかしたらあの後自殺してたかもしれない  
もの。

『あ　りが・・・と　びゃ　く』

ありがとう。ビヤク  
私、生き抜いて見せるからね。  
絶対に。

私の翼。きっと、天使のように白い翼なんだろうね。

だって天使のようなあなたがくれた翼なんだもの。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8754e/>

---

Angels wing

2010年10月20日03時18分発行